栂牟礼神社の創建に当って思うこと

古藤田　太
（会員・弥生町江良）

去る四月十五日、私共はまことに小さい栂牟礼神社を栂牟礼山頂に建立して、社殿の落成式と、尾高知神社佐伯惟治公の御分霊の勧請式を行った。

山頂の地主　木許寛氏の外、佐伯史談会を代表して清田義雄、冨澤泰、軸丸勇、高橋智氏等が出席して下さった。また教育事務所の清杉又成先生も御参加をいただき栂牟礼山頂は時ならぬ地方名士の訪れで賑わった。

本丸跡と称する山頂は、弥生町側の雑木は桜以外は切り払い、その後、佐伯側の眺望を全く妨げていた桧五本を木許氏の好意で伐り、そのかみの栂牟礼城はかくやとばかり、当時を想起するにふさわしいすばらしい眺望となった。

二の丸跡地も小灌木は切り払ったが、周辺の切り払いは、今後の開発の都合上研究の余地あるやに思料されて、当分見合せているところである。

測量してみると、一の丸、二の丸跡地は合せて三反二畝程で、中世山城跡としては極めて広い面積であるらしく、山続きの出城に当る面積を計算すると厖大な面積となるだろう。現在、山全体に四十ケ所に及ぶ「堀切」「切り通し」等の遺構が残っていて、城跡そのものの価値も大きいと思う。

私共が今後栂牟礼を開発してゆく最も大きな障害は登山道の整備で、専門業者の手によって立派な登山道を造るべきだと考えている。古市側から七〇〇m、小田側から六三八mと七二五m、弥生町蕨野からは五〇〇mである。

私共は、この山を歴史・観光、そして信仰の三面から促えてゆき度いと考えているが、信仰上から、大分県下

二十三社、宮崎県下六社の多数の神社に合祀されながらこの栂牟礼城跡に佐伯惟治を祀る社が無いことは、佐伯地方民の心情に悖ると考え、ささやかな宮居であるが今回の建立となったものである。

これまでの長い間には、この山に公をお祀りしたいと考えた人は多かったと思うのであるが、中世に於ては大友氏に、近世に於ては毛利氏に遠慮、憚って建立に至らなかったと考え度い。

この意味で私どもは佐伯地方民の心情を代表して「何かよいことをしたような自己満足」を覚ゆるのである。

時恰も「どこの神社も花ざかり」で、惟治公を祀る尾高知神社参拝道は最近四米道路が古江峠から抜け、大型バスの駐車場も附設されている。残念に思うことは、天正二年（一五七四）以来佐伯惟治公を祀ってきた由緒ある木原神職家が、尾高知神社の神職を免ぜられ、新に三河内の猪股家がこれに代ったことで、更らに尾高知神社独特の祭典、神職の側で線香がたかれ、読経が唱えられているという祭りは消滅するという心配がある。「古いことは何でも良いことだ」とばかり主張するのではないが、珍しい神仏混淆の祭りは永く保存して貰い度い気がしてならない。これが佐伯惟治公を弔う祭祀にふさわしいから不思議である。

地元でこのような革新が行なわれたせいか、今回栂牟礼神社の建立に当って、古くから存じあげていた木原家に御分霊の件を御相談申上げるべく訪れたところ、累代木原家に伝わる佐伯惟治公にまつわる遺品である兜二鉢（尾高知神社火災で焼けている）、槍の穂先一本、惟治公の「小袖」残欠等を譲受状を差出して、栂牟礼神社の宝物として譲受けたことは何物にもまして有難いものと考えている。

徳川時代、各神社では折に触れて神宝を書きあげて、寺社奉行へ提出していたようである。

二十年程以前、木原義邦神官存命中に「北浦村野地元宮神社（鵜尾大権現）書上帖」を拝見させていただいたことがあったが、この中に、「兜三鉢」「御小袖一重」と誌されていた。この兜、小袖が栂牟礼神社に譲られたものである。この佐伯惟治公遺品のことについては、私の書いた昭和四十年『佐伯史談』〃佐伯惟治の最後について〃に詳細に述べてある。

この当時から、尾高知山での惟治公家来の戦死者は三

人以上であったとひそかに考えていた程である。染矢内記（子孫、佐伯染矢恭次郎）、御手洗玄番定信（子孫、蒲江御手洗信雄氏）、野々下馬助（海崎）等はこの兜に何等かの関係があるのかも知れない。

小袖は式用であろうか「衣装櫃」に入れて家来達が担いで、日向落ちしたことを物語るものであろう。何れも当時のものであることを信じて疑はない。

以上は神社建立を機に、思いつくままに述べたものである。

寄贈図書紹介

別府大学紀要　13

大別アジア歴史文化研究所報　3

別府大学発行

文化財としての絵画・彫刻の調査研究に、専門的立場から解明した記事が多く掲載されて、地方での郷土史研究の難点解明に方向づけが有難い。

会員の皆さんに御一読をおすすめする。